

【小羊保護者】

「おじちゃん先生ありがとうございます」

園行事の駐車場当番、何度もおじちゃんと一緒になつて立ち話をした事があつた。

「こつち（関東）の寒さはどうも慣れない」とか「ワシの小さいころはなあ、オヤツと言つたら山で採つた果物でなあ」とか、おじちゃんの声となりで聞くと繪本を読みでもらつてゐる様で、毎回一緒になるのを楽しみにしていました。

最後の入院「明日何が有つてもおかしくない」と聞いて、病室まで教えてもらつたのに顔を見に行かなかつた。おじちゃんの悲しい姿を見たくなかったし、おじちゃんも見せたくないだらうな、と思つたからだ。

おじちゃんが亡くなつた後、保護者会の中から「親子遠足で何か手伝いたい」や「先生が大変そうなので、畑の草取りを手伝つたらどうか?」等、園に協力的な声が増えた。そういうつ一つ一つの気持ちや声の中に、おじちゃんがまだ生きているのだと感じた。これからも心の中のおじちゃんが消えないよう努めていきたい。

そんなおじちゃんが繪本になつた。繪本の中にはいつも見慣れたおじちゃんがいた。園児とおじちゃんの交流を通して、生と死のつむぐ物語を誰にでも感じられる様に完成させて下さつた村尾先生と、おじちゃんの人柄が浮き出る、やさしい絵を描いて下さつた山本先生には心から感謝します。そして、おじちゃんが過ぎした小羊チャイルドセンターと市川先生には感謝以上の気持ちです。

最後に、おじちゃんは私にこんな話を残してくれました。

「今の子どもはかわいそう、小さな時から保育園に預けられて、大きくなればTVゲームばかりでしょ……ワシの小さい頃はなあ……」この言葉に自分の親としての至らない部分を痛感し、おじちゃんの心の豊かさを思いました。おじちゃん先生ありがとうございます、背の低いコスモスが園にそよいでますヨ。

【繪本を頂いて】

「おじちゃんせんせいだいだいだいすき」を幾度となく開き読みました。涙しました。心を洗われました。自分のあゆみを振り返り、心を洗われたのです。それが即、涙となつたのです。おじちゃんせんせいに只々敬服し、感謝の意を表します。有難うございました。

心の芯までポカポカとぬくもりました。

なつかしいと言うか？あつたかいと言うか？言葉がみづからないけど何とも言えない。うれしかつた。泣けてしかたなかつた。

絵から伝わるこの気持ち、表現出来ないけれど、感動で一杯。今度は〇〇先生ね。

最近の事件、胸が悪く不愉快な思いもある一方でこんなお話もあり、人間は限りなく残酷にもなれるし、際限なく優しくもなれるのですね。

人のあたたかみを素直に感じられる内容ですし、先生のお働きが神に祝福され尊かれてることを覚えます。

やさしい涙がにじむような気持ちになりました。

実話に基づくものとして直接に関わつた園児くんにとつては、おじちゃんとことは貴重な幼児体験として生涯を支えてくれる宝ものになると思います。どう子供に接していいかわからず困惑している多くの母親にとつて、おじちゃんの接し方は一つの光でしたね。市川先生の保育方針の実現だね。